

## 合気道小林道場での住み込みを終えて 中山文吾

はじめに

最初に自己紹介をさせていただきたい。私は19歳の男子大学生で、2015年の夏にコロラド州デンバーにある日本館という名の道場で5週間住み込み修行をさせていただく予定の者である。

それを踏まえて今回、所沢道場に寝泊まりして経験した内弟子生活はその本番に向けた事前研修というのが大体の位置づけだと認識している。そんな本番ではない事前研修の感想文をなぜ書くのか、まずはその意味を考えたく思った。

前述からお察しのとおりこの文は人に見せる予定の、自発的に書いたものではない文章である。そこから自分なりに出した結論は「人に見せる文章を書くという意識から、より慎重に自分のしたことを思い出して整理し、何を学んだのかを考える。」それが私に感想文を書かせる理由なのではと思った。勿論ただの推測にすぎない。かといってこれから語る内容を他の人が読んで具体的に何か得るものがあるとも思えなかったので、読む人には誠に失礼ながら、この文を「経験から学んだことを整理し、本番に向けての意気込みを確認するきっかけを作る自分のための作文」と勝手に設定させていただいた。

また話は変わるが、現在所沢道場に住み込んでいるただ一人の内弟子であるトルコ人のレジェップさんには内弟子の仕事をこなすうえで様々なことを教えていただいたので、この場を借りて感謝の意を表したい。

レジェップさん。何も知らなかった私に対して丁寧に仕事内容を教えていただき、本当に有難うございました。

感想

私の内弟子期間は木曜日（夜）～日曜日（夜）のたったの3泊だったが、全てが新鮮で密度の濃いものであった。特に最終日は偶然にも年に3回しか行われない忙しい本部審査の日とかぶっていたこともあり、直後に指導部の方々のお供で出席した打ち上げでの珍事も含めて、語りたいた事があまりにも多い3日間であった。油断すると要点が定まらないままあちこちに話とぶ恐れがあるので、ここでは冒頭にならって「反省点」と「学んだこと」に話を絞りたいと思う。



反省点が2つある。1つは二度目の朝に起こった。気合を入れて早めに設定した目覚ましアラームに気づかず、その時刻からレジックさんの蒲団をたたむ音で目が覚めるまで15分も寝てしまったのだ。もし一人だったらどうなっていたか想像すると今でも震えがくる。

実はその前日、レジックさんからの寝られるときにたっぷり寝ておけとのアドバイスに従わなかった。休み時間もずっと起きており、さらには深夜だろうとお構いなくシャワーと歯磨きを決行したことでさらに自分の寝る時間を遅らせたのである…。起床の後、レジックさんから一週間内弟子を経験したある女性の話を聞かされた。その人は最終日の朝に寝坊して小林先生に激怒されたそうだ。しかし私の場合は早くも二度目にしてこのありさまである。一度目の起床に成功したから気のゆるみが出たようだ。アラームも腕時計に内蔵されている音の小さいものに頼っていたので、全体的に考えが甘かったと反省している。

2つ目の話はアラーム事件の前日、つまり内弟子になった自分にとって最初の朝（正確には昼近く）の出来事である。私はここが日本語の通じる場所であるのをいいことに初日から様々なことを質問しまくった。そのうちに少し観察すればわかるような内容まで質問したので、指導員の方から指摘を受けた。

「初めのうちはわからないことだらけなので、質問をするのは悪いことではないが、誰にも聞けない状況に遭遇することは必ずあり、そのとき何もできなくては困る。だからまずは物事をよく観察し自分の頭で考える手順を踏みなさい」との内容だったと記憶している。まさにこれからアメリカへ行く自分に必要なお言葉であった。

その指摘をくださった指導員は小柳先生という方であった。小柳先生には他にもお茶の汲み方や言葉遣いなど、礼儀を中心に様々な指摘をいただいた。そこでやっと今回の事前研修の目的が分かったような気がしたのである。それまで私はこの内弟子プログラムが「一日に何度も稽古するとはどういうことか身をもって体験してもらおう」、運動を主な目的と

した研修なのではないかと勝手に解釈していたが、それよりも大切な目的というのがこの「礼儀を教える」ことなのではないかと思いだめたのである。

もちろん運動面でも反省点や学んだことが多くあった。内容としては、技の細かい部分を教わる、長時間稽古する感覚がつかむ、といったことが主だったが、それとは全く別に忘れられない経験をしたのでご紹介したい。



道場長のお手伝いで参加した子供クラスでの出来事である。稽古の合間に子供たちを飽きさせないための遊びの一つとして帯を使った綱引きが行われたのだが、その際に私は小学生と本気で勝負して負けるという大失態を演じてしまったのだ。おかげで勝負は盛り上がり、子供たちを大いに楽しませる結果となったが、私にとっては「超」が付く大問題である。勝負が終わった後に笑っていたのは、負けた恥ずかしさをごまかすためではなかった。あろうことか、これから空気の薄いデンバーの厳しい土地で長時間の稽古に挑もうという人間が小学生相手に綱引きでギブアップするような脆弱な体力とメンタルの持ち主であったことにショックを隠せず、その絶望的な気持ちから自然と笑いが込み上げてきてしまったのだ。かなりの重傷である。この事件をきっかけに更なる体力づくりに励もうと決心した。子供クラスに参加したことで得た思わぬ収穫であった。



以上が短い内弟子生活を経て私が感じた「反省点」と「学んだこと」である。

この経験が「デンバーでの内弟子生活を経験するうえでよい事前研修になった」と言えるかどうかは自分が上記の反省点を教訓として日本館でも生かせるかどうかにかかっている。そのため私は今後もこの3日間で得た教訓を記憶に焼き付け、ぜひともアメリカで充実した内弟子生活を送れるよう、体力づくりを中心に努力する所存である。